

---

# 緋弾のARIA 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

柳之助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

### 【Nコード】

N5134Y

### 【作者名】

柳之助

### 【あらすじ】

「あー、レキといちゃつきてー」

この物語は那須家きつての落ちこぼれである俺、那須蒼一が、嫁であり主人であるレキといちゃつきながら、武偵をする話である。ついでに友人である遠山キンジを手助けしたり、しなかつたりする話でもある。

ついでに言えばいつの間にか世界レベルで戦っちゃう話ですらある。まあ、そんな話ではあるが、とりあえずレキの可愛いさを理解して

くれればそれでいいよ。

応援支援感想頼むぜ？

そうしたらーなるべく派手な技を決めてやるからな。

プロローグ 「あー、レキといちゃつきでー」  
by 那須蒼一 (前書き)

とりあえず、短いプロローグ

ブローグ 「あー、レキといちゃつきてー」by那須蒼一

空から女の子が降って来るなんてあるだろうか？  
いや、ない。

そんな事がありえるのは知り合いの根暗ハーレム男だけであろう。  
少なくとも俺、那須蒼一にはない。

これまでもなかったし、これからもないだろう。  
この俺にあったことは。

この那須家きつての落ちこぼれである俺にあったことといえば。

半年前の十月。

知り合い以上、友達未満の女の子に。

ライフルを突きつけられ。

求婚されたぐらいである。

目が覚めた。

季節は四月。

長袖にするか半袖にするか悩む季節だ。といっても本日より高校二年である俺には制服の長袖がほとんどなのだけれど。

ベッドから起き上がり、周りを見渡してみる。

男子寮の寝室。

二段ベッドで寝ているから、視点は高い。

ベッドの下端には我がルームメイトにして男の敵たる根暗ハーレム

男の遠山キンジが睡眠中だ。  
相も変わらず暗そうな顔をしているが、あのゼロの使い魔かかの幻想殺しかというほど美少女を惹きつける男である。  
もはや、新手の誘惑成分を発しているとしても俺は驚かない。  
キンジンとか。

いや、こいつは血筋てきな理由があるからトオヤマンとかだろうか。

ピンポーン。

間の抜けた音が響く。

ああ、またこの根暗に誘われた美少女が一人。  
時計を見れば現在七時。

下に降りてキンジを観察してみる。  
起きる気配はなかった。

「ふむ」

とりあえずかかと落としをキメてみた。

「ぐほお!?!」

「おお、くの字」

腹からきれいなくの字に折れ曲がった。

「何だ!?! 敵襲か!?!」

「いや、お客さんだ」

跳ね起きて周囲を警戒するキンジ。  
それに優しく声をかけてやる。

「ん、ああ。白雪か……。ところで蒼一」

「ん？」

「なんか腹が誰かにかかと落とされたとように痛むんだが……。知らないか？」

「知らん、とつとと玄関行けよ」

「あ、ああ」

寝間着のまま出て行くキンジ。  
彼を見送り、ベランダに出て空を見上げる。  
自らの朝の行いを思い返して、

「うん」

「一つ頷いて、」

「いいことした朝は気分がいいなあ」

今日もいい日になりそうだ。

あ、星伽の悲鳴が聞こえた。

キンジの寝間着にでも興奮したのだろうか。

しかし、しかしだ。

俺、那須蒼一の予想は外れることになる。

おおよそ全てのことに対して非才の身だか勘も大したこと無かったらしい。

この日より、俺はルームメイトとそのパートナーのせいで始め成り行き、途中からは自ら、世界レベルでの戦いの中に飛び込むことになるのであった。

「あー、レキといちゃつきてー」

無論、今はまだ知らない。



ブログ 「あー、レキといちゃつきでー」「by那須蒼一（後書き）

感想待つてまーす。

……ブログただけだけど。

今日もう一度更新したいとおもいます。

第1巻 「そんな、かわいいだなんてー何を今更な」byレキ

いいことしたなあ、と思いつつ部屋に入り制服に着替えておく。  
部屋を出てリビングまでいけば。

「おいおい、そりゃあ確かに今日は始業式だけどさ」

机の上に広げられていたのは豪華絢爛な朝飯だった。  
デカイ重箱に納められたら色とりどりの食事の数々。

お正月か。

「あ、おはよう。那須くん」

「おう、おはようさん。星伽、どれ」

あいさつもそこそこに、重箱のおかずを手を伸ばすが、

「115」

「あいた」

キンジにはたかれた。

「なにすんだよ」

「せつかく白雪が作ってくれたんだから、ちゃんと頂きますくらい  
言え」

「へいへい」

不承不承で俺が頷いている横では、

「キ、キンちゃんが私のためにお、怒って……はっっ」

星伽がトリップしていた。

まったく、キンジが絡まなければまとものだが。

スタイル抜群の大和撫子で超能力捜査研究科《SSR》の秘密兵器にして生徒会長、園芸部部长、女子バレー部部长、手芸部部长を兼任し、拳げ句の果てには平均偏差値四十五の武偵校において脅威の偏差値七十五を叩き出すハイスペック。

聞けば誰もが尊敬するような才媛だが、その正体は俺から言わせればただの色ボケだ。

もし仮に、彼女の脳内を調べて見れば占められているのは“愛しのキンちゃん”に間違いない。

欲望の怪物が生まれたら、絶対にキンジを拉致るか、周囲の女子を撲滅するだろう。

恐ろしや。

もつとも、欲望に忠実なのは人のこと言えないのだが。

それゆえに、食事前のあいさつもせずにおかずを摘もうとしたのは、御覧の通り星伽にいい思いをさせるためである。

決して俺の行儀が悪い訳ではない。

決してない。

とりあえず俺も座る。

三人で手を合わせて。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

三人で食後のミカンを頬張る。

ちなみに俺は自分で剥いたがキンジは星伽に剥いてもらっていた。  
子供か。

「いつもありがとな」

「えっ。あ、キンちゃんもありがとっ……ありがとっございます」

「なんでお前がありがとっなんだよ。ていつか三つ指っくな。土下座してるみたいだぞ」

「だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言ってくれたから……」

……ミカンうめー。  
とりあえず、星伽の下着が見えて興奮しているだろうキンジは放  
っておく。

七時四十五分。

武偵殺しやら女難の相やら話し続けている二人を置いて、男子寮  
を出る。

自転車を押して向かう先は女子寮だ。

今年から入ったであろう一年生は不審な目を向けるが、二年以上  
には慣れたものである。

入口には一人の少女。

ただの少女、ではない。

美少女である。

澄んだ青い髪。

透き通った無機質ともみえる琥珀色の瞳。

抱きしめたくなるような矮躯。

アンバランスなヘッドホンですら少女の魅力の手助けとなってい  
る。

背には長い棒状の袋を背負っている。

触れれば、壊れそうな儂い雰囲気を纏う少女。

彼女が。

彼女こそが。

俺、那須蒼一の主にして恋人。

本名不詳の美少女。

魔弾の姫君、レキである。

「おはようございます、蒼一さん」

「おう、おはよう。レキ」

ほんのわずかに。

それこそ俺にしか分からないくらいに笑った。

今日も相変わらずかわいいなあ。

思わずにやける。

オマケに口に出していたらしい。

レキが反応して、

「そんな、かわいいだなんてー何を今更な」

なんか大分レキもエクストリームはいつてきたが大丈夫だろうか。

まあ、いいか。

かわいいし。

「失礼します」

レキが自転車の荷台な横向きに座る。

彼女の片腕が自分の腰に回ったのを確認して、

「じゃ、出さずせ」

そんな風に。

なんかこう純愛カップル風に出発したのは良かった。

途中で、バスに乗れなかったらしいキンジに遭遇したのはまだ許せる。

そのせいで二人きりの時間がなくなったのも許そう。

俺は、器の大きい男なのだから。

だが、だがしかし。

いくら何でもー

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

などと、某ボーカロイドので脅されるなんて有り得ないだろう。

第1巻 「そんな、かわいいたなんてー何を今更な」byレキ(後書き)

なかなか話が進まない……

次回、戦闘シーンあります。

感想謝辞

チキン執事様、プーモ様感想ありがとうございます。これからも頑張らせていただきます。



第2巻 「なんでお前は自分と自分の嫁のことしか頭にないんだよー!」 b y 遠山

「ぬおおおおおー!」

「をおおおおおー!」

「……………」

後ろにはレキが、横にはキンジがいる。

グラウンドを走る。

自転車を漕ぐ。

ただ走っているのではない。

爆走である。

何が悲しくて、四月始めから自転車で爆走しなければならないか  
というと。

俺とキンジの後ろ。

数メートル離れて俺達を追いかけてくるのは。

「な、なんでー!」

キンジが横で叫んだ。

「なんで朝から強襲科マサルトの校舎らへんからいきなり現れたUZI装備  
のセグウェイに追いかけてられて、自転車に仕掛けられたら爆弾にビ  
ビリながら学園島爆走しなきゃなんないんだー!」

……………つむ。

やたら長い説明口調ありがとう。

キンジが叫んだ通り、俺とレキにオマケで登校し。  
俺とキンジ《…………》が所属する、強襲科<sup>アサルト</sup>の校舎でそれは現れた。

セグウェイである。

だだのセグウェイじゃあなかった。

UZI装備である。

ボイスは某ボーカロイドである。

二機同時である。

需要ねえよ。

「蒼一、なんとかならないか!？」

「なんとかって言われてもなあ…………レキ？」

「難しいです」

レキは愛銃ドラグノフに目を遣り、

「今の状況では流石に二機同時落とすのは難しいですし、落としても増援が来ないとも限りませし」

「だよなあ……」

ちよつと考えてみる。

ふむ。

「キンジ！ プランA出来たけど聞くか！？」

「聞かせる！」

態度がデカイ気がするか今は気にしない。  
後で締めるが。

「まず、俺がレキを抱えて跳ぶ」

「それで？」

「自転車はこの際諦めて、一度キンジに引き付ける」

「それから？」

「キンジが何か新しい力に目覚めるのを期待して俺とレキは登校する」

「目覚めるかー！」

やかましい。

そこか主人公属性でどうにかしろ。

「なんでお前は自分と自分の嫁の事しか頭がないんだよ！」

おいおい、なんてこと言うんだ。

そんなこと言われたら、

「照れるなあ」

「照れるなー！」

「………案外余裕ですね、二人共」

と、まあ。

案外余裕を持っていた俺たちだが。

いい加減どうにかしたいなあ、と思いだした頃だった。

「ん？」

先に気づいたのはキンジだった。

視線の先はとある女子寮の屋上。

いたのは一人の少女だった。

武偵校のセーラー服にピンクのツインテールの小柄な少女。

何か背負っているようだが、よく見えなかった。  
とりあえず視力をあげてみた《……………》。  
確認すれば、

「…………パラグライダー？」

「そのようですね…………まさか」

素でも両目の視力6.0を誇るとんでも視力の、レキも確認したらしい。

そのレキの僅かに驚いた声と同時に。

「はあ!？」

飛んだ。

キンジの間抜け声が響く。

空中にてパラグライダーを展開。

そのままこちらに飛んでくる。

「バ、バカ! この自転車には爆弾が…………」

今更遅い。

だが、キンジの叫びももつとだ。

こつちには自転車付き爆弾と、UZI装備の誰得セグウェイがある。  
そんなのに突っ込むのは自殺行為だ。

ある程度の実力が伴わないかぎり。

しかし。

彼女は相応の実力の持ち主だったらしい。

両太腿のホルスターから銃を抜く。

黒と銀のガバメントによる二丁拳銃。  
それらを構え、

「ほら、そののバカとも！ さっさと頭を下げなさいよ！」

ぱんぱんぱんぱん。

四発が四発ともセグウェイのタイヤに命中する。  
後ろに転がっていった。

それは実に歓迎すべきことだが、

「異議あり！ バカはその根暗だけで……うおっ！」

「そんなのに引つかかっている時点で十分バカよ！」

おっしやる通りで。

それはともかくかなりの腕前だ。

パラグライダー装備での精密射撃などそうできはしない。  
少なくとも俺にはまず無理だ。

銃火器の類は苦手である。

謎の飛行少女は俺とキンジを交互に見るが。

「バカじゃないこと証明してやるからあっちのバカを頼む」

判断は一瞬。

少女は意識をキンジに向ける。

その上で姿勢を変える。

頭を下に、持ち手に足を引っ掛ける。

そのままキンジをかつさらうのだろう。

向こうはもういいと判断。  
俺達も逃げるとしよう。

「レキ」

「はい」

「飛んでくれ」

「ーはい」

飛んだ。荷台から後ろへ。

なんの迷いもなく。

なんの躊躇いもなく。

なんの疑いもなく。

跳んだ。

車体が重さを無くす。

かなりのスピードで走っていたため、地面落ちたら最悪死ぬ。  
がしかし。

この俺がそんなことをさせる訳がない。

かつて実家とのいざこざがあり人間不信の人間嫌いだったがとある吸血鬼もどきのように美少女だけは例外だと謳ってきたこの俺に限っては有り得ない。

コンマ数秒の差をもって俺自身も跳んだ。

ただ跳んだだけではない。

「おりゃ！」

思い切り蹴飛ばした。

自転車がひしゃげぶっ飛ぶが、確認せずに後ろを向く。

着地。

特殊合金を仕込んだ靴底から火花が散ったが気にしない。  
スライディング気味に飛び込んで。

「お待たせ、ハニー」

「お気になさらず、ダーリン」

受け止めた。

お姫様抱っこである。

キンジに視線を移せば、

「ふぼっ！」

謎の飛行少女の胸に頭を突っ込んでいた。

ドカーン。

自転車が爆発した。

そんな感じで。

美少女をお姫様抱っこして。

美少女の胸に頭突っ込んで。

俺達はセグウェイから逃れた。



「しつこいなあ」

セグウェイから逃れたはずだった。

しかし、

「これ、倒しても倒しても出てくる無限ループじゃないよな」

「さすがないと思いますけど」

先ほどレキが予想したように。

お姫様抱っこでセグウェイから逃れた俺達に。

やっぱりUZI装備のセグウェイが来た。

今度は7台。

俺達2人を半円で囲うように来た。

「やれやれ、しつこい奴は嫌われるって相場がきまつてるぜ？」

「私はしつこくても蒼一さんが好きですよ」

「当然俺もだ」

さてと。

構える。

足は大きく開き、腰を深く落としいー

左足を前に出して爪先を正面に向けて。

右足は後ろに引いて爪先は右に開き。

右手を上に乗手で左手を下にして、手は平手。

相手に壁を作るような構え。

とある無刀の剣法の一の構え。

「来いよ、最強の拳を教えてやるっ」

拳士最強、那須蒼一推して参る。

気。

およそあらゆるバトル漫画に登場する代表的な異能である。

生命力を戦闘力に変えるスキル。

気力を実力に変えるスキルである。

視力を強化して遠くを見たり。

脚力を強化して自転車を蹴り飛ばしたり。

俺は。

那須蒼一はそれが使える。

那須蒼一の唯一にして絶対のスキルだ。

それは俺が。

ありとあらゆる才能から見放されたこの俺が。

那須家の落ちこぼれである俺が。

才能に見放され、落ちこぼれであるがゆえに得たスキルである。

それをもって俺は、自らを最強の拳士だと名乗るのだ。

「気を使えるとは何が良いつていえば、漫画や小説の技が大体使える  
ってことだ」

虚刀流。

虚しき刀の流れ。

とある刀集めの物語に出てくる最強の剣法。

刀を使わない剣法。

現在、俺のお気に入りの流派。

呟きながら、セグウェイとの距離をゼロにした。

ただ近づいたのではない。

気を宿した脚で地面を蹴り、そのまま前蹴りである。

その時間は僅か0.5秒。

「虚刀流、『薔薇』——！」

一機破壊。

さらに隣の二機掛けて、独楽の如き後ろ回し蹴り。

「虚刀流、『牡丹』——！」

三機破壊。

右端の奴に近づき、気を宿した鋼の如き貫手を繰り出す。

「虚刀流、『蒲公英』——！」

セグウェイの車体に突き刺さり、そのまま左端のにぶん投げる。

激突、破壊。

五機破壊。

其処にしてようやく他のセグウェイが動いた。

残りの二機がこちらを向き、

ばばばばばん。

ばばばばばん。

連続で発砲した。

がしかし。

着弾点に俺はもういない。

セグウェイがこちらを向いたと同時に跳躍。

そのまま脚を足刀に見立てた、前方三回転のかかと落とし——！

「虚刀流七の奥義、『落花狼藉』——！」

一機がまるでプレスされたように縦にひしゃげた。

六機破壊。

続いて最後の二機を狙おうとして、

ぱあ——ん。

最後の二機が吹き飛ばされ、大破する。

見ればレキが立ち膝でライフルを構えていた。  
全機破壊。  
戦闘終了。

「ふう」

予期せぬ無駄な戦闘に溜め息一つ。

「サンキュ、レキ」

「いえ、夫を支えるのも妻の役目ですので」

おお。う。

そんなこと言われたらテンション上がったちゃうぜ！  
どうしよう。

どのようにしてこのハイテンションを表現しようか。

「蒼一さん」

レキがこちらに来た。

おお、ここは抱擁からのキスだろうか、いやしかし朝からグラウンドの真ん中でそれはどうなのだろうか、まあいいか。いや、ほら頑張ったしね俺。だからご褒美が必要であって、それがたまたまレキとのハグアンドキスなだけで別にそんなにしたいわけじゃないからだって別にこんなタイミングじゃなくてもできるし、いや本当い仕方がないっていうかでもレキが、してくれるのなら受け取らないと悪いし。だから、まあいいか。  
うん。

心のなかで、言い訳を展開し尽くし、

「さあ、カモンハニー！」

両腕を広げて待ちかまえる。

「はあ」

別にそれはいいですけど。

「遠山さんたちのこと、忘れてません？」

「……………あ」

体躯倉庫。

ちよつとした戦場になったいたそこを俺達は二人して覗いていた。  
もっともキンジも謎の飛行少女ももういないのだが。

事の一部始終を覗いていて、

「なあ、レキ」

「はい」

「友人が性犯罪に走った場合どうすればいいのだろうか」

「笑えばいいんじゃないですか？」

そうか。

「はははは」

……笑えねえよ。

そんな安いネタでもねえし。

セグウェイどもはこちらにも来ていたがすでに破壊されていた。

問題はそれを破壊したのがキンジだということだ。

素のキンジにはできないだろうから、つまりなった《・・・》の  
だろう。

問題は、

「状況的にさっきの飛行少女だろ……どう見ても中学生が下手した  
ら小学生だぞ」

「あれだけ周りに女性がいるのに何もなかったのはーなるほど、  
少女趣味だったんですね」

「だな……」

これは一武偵として捕まえなければならぬだろうか。でも部  
屋が広くなってラッキーかも。

それに一人暮らし。

魅力的な単語。

まあ、飯が問題だけど……待てよ。

「キングがいないと星伽が来ない……あの飯が食べなくなるのはなあ」

それは惜しい。

仕方ないので見逃してやろう。

脅しのネタ程度で許してやる。

俺って優しい。

腕の裾を惹かれた。

「蒼一さん、料理なら私もできますよ」

「……言うておくが、この前のカロリーメイトの盛り合わせは料理じゃないぞ」

「もちろんですーSOYJOYの和え物なんてどうでしょうか」

「それも料理じゃねえよ」

栄養食品から離れる。



第2巻 「なんでお前は自分と自分の嫁のことしか頭にないんだよー!」 b y 遠山

主人公紹介とかやったほうがいいでしょうか。  
見たい人は言ってください。

感想頂けるとテンションあがります。

もしよかったら一言でもお願いします。

11/27修正しました。

第3巻「……風穴開けるわよ！」by神崎・H・アリア

「武偵殺し？」

結局俺たち三人は始業式に出れず<sup>マスターズ</sup>教務科に朝の爆弾騒ぎを報告し  
終え、教室へと向かっていた。

「……の模倣犯だよ」

ものすごくげんなりしたキンジは言った。  
背負っている空気が暗い。

「確かに先日逮捕されたと報道がありましたね」

「そつえば、朝お前と星伽が話してたな……」

「ああ……」

かなり元気ない。  
理由はまあ、解っているが。

「ん？口、どうしたんだ？リ、さっきから、コ、元気が、ン  
無いぜ？」が

「何やら不愉快な副音声が聞こえるんだが……！？」

「ダメですよ、蒼一さん。遠山さんは今大変なんですからー己の  
隠された性癖に気づいて」

「この外道夫婦が……！」

また、夫婦だなんて。

照れるなあ。

「いいか？俺のは体質だし、大体あいつは高2だった！」

「でも見た目小学生相手になったんだろ？ロリコンじゃねえか」

「それに興奮したことをそんな威張られても。変態ですね」

「この……！」

廊下にキンジの声が木霊する。

「どーせ、もう会うことなんかないだろうからいい加減止めろ！」

.....

「先生、あたしはあいつの隣に座りたい」

「フラグだったー!?」

21A教室が一気にざわめいた。

一瞬の後に、

「うおー！ またキンジか！」

「さすが特級フラグ建築士！」

「くそ、俺星伽さんに賭けてたのに！ 良妻系幼なじみが負けたと  
!?」

「俺は戦妹アミカの風魔にかけたんだけどなあ！ 教え子忍者なんていない  
ぜ!?」

「理子は色物過ぎたか!? ゴスロリ巨乳でいいじゃん！」

「俺なんか大穴狙いで通信科コネクトの中知空で賭けてたんだけどなあ！  
武偵高が誇る前髪枠が！」

「くそ、ピンクツインテロリの転校生だなんて胴元の一人勝ちじゃ  
ねえか！」

「まてまてまてまて、何の話をしてる！ というか胴元って誰だよ  
!?」

皆が一斉に俺の方を指で指した。

その指は俺を貫通し後ろの席にいたレキを指している。

「おいおい、お前ら——人の嫁疑うなよ」

「お前だ——！！」

やかましい。

件の少女——神崎・H・アリアーはやかましい連中を無視して、キンジの前まで来て、

「キンジ、これ。さっきのベルト」

一瞬で静かになった。

思うことは一つだ。

え、もうそこまでいったの？

……まあ、実際はそんな話じゃないんだが。

面白いので言わない。

「理子分かった！ 分かっちゃた——これフラグばっきばきにたってるよ！」

叫んだのはキンジに左隣の金髪ゴスロリ女、峰理子だ。

キンジ曰わく、探偵科ナンバーワンのバカ女。

俺曰わく、キンジハーレムの一員。

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！ これ謎でしょ！？ これ謎でしょ！？ でも理子には推理できた！ できちゃった！」

うるせえ。

謎の踊りを披露しながら叫ぶ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！  
そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり2人は――熱  
い熱い、恋愛の真っ最中何だよ！」

セクハラで始まった恋愛はありなのだろうか？

周囲は理子の推理に聞き入っている。

キンジは何言ってるんだこいつ、という顔をしている。  
やっぱり面白いので放っておく。

「ソーくんに負けないくらいの！」

「誰に負けないだとお、キンジ!？」

「俺か!？」

「いいぜ、見せつけてやろうじゃねえか！ レキ！」

「いいでしよっ！」

ノリノリだ!？、と皆が叫んだ瞬間。

ずぎゅぎゅん！

二発の銃声がクラスを凍りつかせた。  
音の下は、顔を真っ赤にした神崎。

「れ、恋愛なんて……くだらない！」

翼のように広げた両腕の先、左右の壁には穴が一つずつ。

理子は謎の踊りの姿勢のまま席に着き、レキはヘッドホンの音量を上げて目を閉じて着席。

いや、それは逆に危ない。

「全員覚えてきなさい！　そういうバカなこと言う奴には……」

それが神崎・H・アリアの武偵高に発した第一声。

「――風穴開けるわよ！」

……決めゼリフかけえなあ。

第3巻「……風穴開けるわよ!」by神崎・H・アリア(後書き)

嫁レキが何気に人気(笑)。

携帯で書いていると、長文が書きにくいので基本このくらいな長さでやっています。



第4巻 「このー！DXカツ丼定食780円を！」 by 風魔陽菜

「し、師匠、本気でござるか？」

「ああ。構わん」

焦ったような声を出すのは謀報科レサトの一年、風魔陽菜。  
それに答えたのは彼女と戦妹契約を結んだ強襲科アサルト二年、遠山キン  
ジ。

「で、ですが、師匠！ 某には……！！」

「お前への正当な報酬なんだ。気にするな」

「し、師匠……」

風魔は感極まったように笑顔を浮かべ、しかし戒めるように首  
を振り、

「ですが、この身は未だ修行中の身ゆえやはり受け入れられないで  
ござる」

「まったく……」

キンジは呆れたように首を振り、

「分かった。お前が受け取らなければ、これは棄てる」

「……師匠……そこまで某の事を……」

そして、風魔は意を決し、

「了解にござる。この不肖風魔陽菜、師匠のお気持ち受け取らせて頂くござる。そして、そして！ 噛み締めさせて頂くにござる、師匠の一番弟子と成れた事と師匠から承るこのー」

風魔はもはや涙すら流し、

「このーDXカツ丼定食780円を！」

目の前の丼を食らいに行った。

「ああ、よく味わえ」

キンジはしみじみ言った。

「……」

「……」

なにこの茶番。

……

「神崎・H・アリア、強襲科所属でランクはSランクにござる。モグモグ」

「Sランク……、レキと一緒にか」

「ついでに言えば一年前のお前とも一緒だ」

「私は現在進行系でSランクですが」

昼休み、学食にて。俺、レキ、キンジ、風魔はいた。

キンジの頼みで神崎について調査をした風魔の報告を聞くためだ。俺は中華定食。

レキはカレー。

キンジは和風定食をそれぞれ注文していた、

「某が知る限りでは使用武器は二刀と二丁拳銃。また、バーリ・トウードの達人、ロンドンで活躍していたらしいにござる。ハグハグ」

「ああ、それは実際朝味わった」

「活躍って、どんなもんかわかるか？」

「さすがに時間が無かったので、そこまでは……。噂では失敗したことがないとか……」

「それはそれは……」

口元が歪む。

天才、というやつか。

大間違いだ。

実家において失敗続きだった俺とは。

そして、天才といえば――。

「蒼一さん」

「ん」

「そういう蒼一さんはカツ」よくないですよ」

「そりゃ失敬」

やれやれ。

嫁には頭があらんよ。

「……それで？ 他に知っていることはあるか？」

「あ、後は……」二つ名が『双剣双銃カトラのエリア』ということくらいしか分からないでござる」

「『双剣双銃』、か……」

キンジは呟き、

「ありがとな、風魔。また、何かあったら頼む」

「御意。で某はこれで。ごちそうさまにござりました」

いつの間にかカツ井を平らげていた風魔がは一度、懐から煙玉ら

しきものを取り出し、

「……」

周り、即ち昼食中の他の生徒を見て。  
しまつて、普通に小走りで帰つてた。

「……さすがにこんなところで煙玉は使わなかつたか」

「お前、自分の戦妹アミカのことどう思つてたんだよ」

「それにしても……若干情報が少ないように思えますが」

「分かつてる。後で理子にも調査を依頼するつもりだ」

「峰か、まあ悪くない人選だ」

あのおもしろ女はスペックは高いからなあ。  
変人だけだ。

「きつと向こうも」

レキか、ポツリと言つた。

「きつと向こうもキンジさんや蒼一さんのことを調べてるんでしょ  
うね」

「だらうな……」

「まったく酔狂な奴だな、おい」

レキはともかく、

「Eランクの俺たちの事を何を調べるんだか」

.....

「.....どういうこと?」

神崎・H・アリアは戸惑っていた。

朝の三人について軽く聞き込みをした事についてだ。

遠山キンジが一年にしてSランクだったにも関わらず、今年もEランクになっていることにはない。

レキが本名不肖出身地不明にして、自らと同じSランクの武偵であることにはない。

那須蒼一。

こいつだ。

那須蒼一が拳士最強を名乗っていることだ。

何故ならば自分が知る拳士最強は――彼ではない。

「あの噂.....ホントだったてこと?」

自分が武偵高に転校する少し前のこと。

アリアの知る拳士最強——握拳烈にぎけんれつが。

この極東の地にてとある武偵高の生徒と戦い、命を落としたとい  
う——あの噂は。

真実だったということか。

**第4巻 「このー！DXカツ丼定食780円を！」 by 風魔陽菜（後書き）**

冒頭で真面目な話だと勘違いした人は何人いるかな？

この作品、メイン投稿の『流転の悪役』よりお気に入り登録や、評価ポイントの伸びが良くて少し複雑。

終わクロや、恋姫が、好きな人は読んでみてくださいください。

11/29 風魔の口調修正



第5巻」 その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」bY那須蒼一（前書き）

ちよっとシリアス回。

第5巻 「 その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」 b y那須蒼一

「キンジ、あんたあたしの奴隷になりなさい！」

「……………」

「……………」

「……………」

自分の部屋に帰って、リビングの扉を開けたらルームメイトが特殊なプレイに誘われていた。

どっしりよじり。

……………

ひとまず、空きかけのリビングのドアを閉める。

レキと顔を見合わせ、

「おいおいおいおい、キンジの奴授業終わってソッコー帰ったと思っただら何してんだよ」

「キンジさん、そこまで特殊な性癖があったんですね　やはり」

「ロリコンでDMか　だと思ったぜ」

「バーン、という音と共にドアが蹴り開けられた。

「そこはせめてまさかとも言えよ、この外道ども………！」

息を荒くしたキンジだ。

レキを庇うように前が出る。

レキも俺の後ろに隠れる。

「おいおい、興奮すんなよ」

「きゃー、怖いですー」

「お前ら………！」

「キンジ、飲み物くらい出しなさいよ！」

リビングの中から神崎の声。

「コーヒー！　エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！　砂糖はカンナ  
！」

呪文かよ。

もはやキンジは、もういやだこいつらという顔をしてリビングに戻っていく。

……淹れるんかい。

.....

もくもくと湯気を上げるインスタントコーヒー。  
ソファに座った神崎はそれを物珍しそうに眺め、

「これホントにコーヒー？」

などとおっしゃった。

それ以外のコーヒーなんて知らない。

「……ヘンな味、ギリシャコーヒーにちょっと似てる……。ん  
でもちよっと違う……。」

ブツブツとつぶやきながらコーヒーを飲んでいる。

「ギリシャコーヒーって、どこのメーカーだ？」

「普通にギリシャ産ってことじゃないですか？」

ああ、なるほど。

「味もメーカーも産地もどうでもいい、それよりもだ」

キンジもコーヒー片手にソファに座り、

「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその……お前を怒らすような事を言ってしまったことは謝る」

軽くキンジが頭を下げた。

……いつの間にかシリアスに。

「でもだからってなんでここに押しかけてくる？」

「分んないの？」

「分るかよ」

神崎は少し意外そうな顔をし、

「あんたならとつくの昔に分ってると思ったのに。まあ、いいわそのうち思い当たるでしょ」

神崎が肘かけにもたれる。

「おなかすいた、なんかないの？」

あ、今キンジがドキッとした。

「ね、ねーよ」

「ないわけないでしょ、あんたたち普段何食べてんのよ」

神崎の視線がこちらに向いた。

「カロリーメイトです」

「実は霞が主食なんだよ」

「……いつも下のコンビニだ」

スルーしやがった。

「じゃあ行きましょう。あ、そうだ」

神崎はソファから立ち上がって、キンジの顔を覗き込み、

「そこって『松本屋』のもまんってある？ あたし食べたいな」

と、キンジを赤くさせている横で。

「……私たち若干空気なような」

レキが小さく呟いたのを聞き逃さなかった。  
言っなよ。

.....

「握拳裂りぎけんれつつて知ってる？」

それはキンジが神崎の命令によりコンビニにはしらされ、出て行って突然聞かれた問いだった。  
突然の問いに対し、

「俺の師匠だ」

間髪いれずに答えた。

「」

ふう、俺はため息をついた。

隣で僅かにレキが身を固くしたが、それには構わず、

「つーか、自己紹介まだだったよな。那須蒼一だ」

「……レキです」

「神崎・H・アリアよ……それよりも、師匠？」

「ああ、10歳の時から15歳までだったけどな。それがどうかしたか？」

神崎は眉を細めて、

「……あんた、拳士最強とか名乗ってるらしいわね」

「ああ、きちんと前任者から襲名したぜ」

「なら、握拳裂からあんたは拳士最強を引き継いだってこと……?」

「そうだけど、それがどうかしたのか?」

「……私はロンドンで拳士最強は握拳裂っていう日本人って聞いた。でもこの武偵高に来てからはそれはあんたで、ついでに気になる噂もロンドンで聞いたわ」

「へえ、どんな」

レキは何も言わず目を伏している。

「『日本で握拳裂は武偵高の生徒と戦って死んだ』。つまりこれって……」

「ああ、そうだ」

俺は一度区切り、無表情で言った。

「握拳裂は俺が殺した」

「!」

神崎の目が見開かれる。

レキは無言で俺のシャツの裾を握った。



……かわいいなあ。

「勿論、簡単に殺したわけじゃないぜ」

そういつて俺はネクタイを緩めた。

シャツのボタンを外し、下シャツも脱ぐ。

神崎は一瞬顔を赤くしたが下シャツの下にあったモノを見て、またも目を見開いた。

黒髪に蒼みが掛った目、顔つきもそれなりな俺の見た目。

引き締まった筋肉質の身体にそれはあった。

傷跡だ。

左肩から腰まである縦の傷跡。

それに交叉する、左の脇腹から右肩に走る斜めの傷跡。

心臓のあたりを中心とした十字の傷跡だ。

「ほかの痕は消せたけど、コイツは深すぎて消せなかった。まあ、一生残るわな」

そして、もちろんそれだけではない。

レキも今は無言で隣にいただけだが、彼女自身も胸の中央に何か刺さったような傷跡がある。

無論、それは俺は言わない。

「ついでに言えば、俺が今Eランクなのもそのせいだ」

「」

「武偵憲章第九条、それも守れないような奴はEがお似合いだよな」

もっとも、それ以前から俺のランクはCランクだったのだが。

「なあ、神崎」

言葉を失った神崎に俺は声を掛ける。

「俺はお前がどういつつもり《……………》か大体分かる」

「!!」

音を立てて勢いよく立ちあがった。

「ああ、勘違いすんなよ、お前の素姓とかは知らん。でも何のためにキンジに近付いたかは分る」

「……………あたしには、時間が、ない、のよ」

絞り出したような声だった。

まるで何かわるいことをして、しかしそれを認められないような声だった。

「そうか、別に俺は何も言わない」

実を言えば半年以上前、レキに惚れる前の俺も似たようなモノだった。

戦う意味を探していた頃。

戦い覚悟を求めていた頃。

「きつと、お前の探してるのはキンジだろうさ」

自らの主を探していた俺。

神崎も自分にとってのナニカをさがしているのだろう。  
そのナニカは大体予想はつく。  
だが。

「だが、もしもお前の都合でキンジを傷つけてみる」

「」

朝、彼女自身が言った決め台詞をそのまま返すように、

「その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」

言った。

「……あんた、やけにアイツのこと庇うのね」

「ああ？ 当然だろ」

俺は誇らしげに胸を張る。

なぜならアイツは。

「俺の親友だ」

もっとも、本人の前では絶対言わないが。  
あ、帰ってきた。



第5巻」 その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」b y那須蒼一（後書き）

嫁レキ空気回。

ちよつと語られた蒼一の過去。

これでも30パーセントくらい。

まだまだいろいろあります。

早く過去編をやりたいなあ。

魔剣編より先にやっちゃおうかなあ。

宣伝

龍之介の活動報告のPV予告ボタンに刀語×戯言、人間シリーズの予告あります。

できればコメントとかください。

感想も期待させていただきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5134y/>

---

緋弾のエリア 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

2011年12月1日00時53分発行